

どうしよう



「あっ、とんぼだ。」
友だちと遊ぶために家を出たぼくは、げんかんのそばの花だんにいたとんぼを見つけた。いそいで虫あみを取りに行った。

さい近、このへんでとんぼを見かけなくなった。しかし、きのう、たけしが自まんげに虫かごのとんぼを見せてくれた。

今日のとんぼは、たけしのとんぼよりかくじつに大きい。ぼくは、ぜっ対にとってやると思った。そつと近づき、あみをふり上げた。そのしゅん間、とんぼはにげた。

ぼくは、追いかけた。とんぼは、家の前の道路へ出て、となりの畑に行った。ぼくは、こんどこそつかまえようと、ひつ死にあみをふりまわした。

「やった。つかまえたぞ。」

やつとのことのでつかまえたとんぼは本当に大きかった。さっそくたけしに見せようと、みんなが遊んでいる広大新開公園にいそいだ。



その日の夕食のとき、お母さんが、
「夕方、となりのおじいちゃんに会ったら、畑があらされたって、おこっていたわ。」

「えっ。毎日、朝早くから畑仕事にせいをだしていたから、おこるのは当たり前だ。」

と、お父さんもきびしい顔になった。ぼくは、体がかたまった。体中の血がづめたくなるような気がした。
(ぼくのせいか……。)

「とくに、広かんらんが大へんみたいよ。」



「広かんらんっていったら、あのでんとう野さいの広かんらんか。」

「そう、あれは、あまくておいしいのよね。でも、虫もそれをよく知っていて、育てるのが大へんらしいわ。今は、植えかえて、やっと根づき始めた大事な時期だったそうよ。今年の夏は、とくに暑くて大変だったって。」

「一度だけ、あれで作ったおこのみやきを食べたことがあるけど、おいしかったですよ。さんねんだね。」

「だれがしたんだらうね。おじいちゃん、が、がっかりされていたわ。」

お父さんやお母さんの話が聞こえなくなっていた。食べているものの味もなくなった。ぼくは、自分がしたことを思い出そうとした。しかし、とんぼをとるのにひっ死で走り回り、どこをどう走ったか思い出せない。でも、となりの畑に入ったのはたしかだった。

(畑をあらしたのは、ぼくかもしれない。)

と思いつながら、声にならない。

(どうしよう。)



その日の夜、ふとんに入ってもねむれなかった。まどを開け、真っ暗でよく見えない畑をながめた。となりのおじいちゃんがあせをふきながら一生けん命に畑仕事をしているすがたや、ぼくがあみを持つて畑を走り回っているすがたが頭の中にこうごにうかんでくる。

(ぼくはどうしたらいいのだろう。)